

社会的見方・考え方を育成する学習支援システムの活用による 中学校社会科授業の改善

授業実践者 南畑好伸

1. 学年

中学校第2学年（男子13名・女子12名・計25名）

2. 単元名

人口からみた日本の特色（全9時間）

3. 目標

わが国の地域的特色を人口の面から追究し理解する。

4. 単元の構想

4. 1. 授業改善の方向性

国際化、情報化、少子高齢化、環境問題の深刻化、経済のグローバル化など「変化」は現代社会を特徴づけるキーワードである。このような急激で不可視的な社会の変化に対応するために、子どもたちが身につけるべき力は多岐にわたる。例えば、情報を選択し、活用する力、柔軟に思考する力、豊かな創造力や表現力、確かな判断力、自己学習力などがあげられる。「生きる力」にもつながるこれらの資質や能力を授業でいかに育てていくか、社会科教育においてもその具体的な手立てを明らかにすることが課題となっている。

そこで本実践では、生徒が社会的事象を的確に捉えるための視点を持ち、社会の問題に対して習得した社会認識内容を関連づけて考え、合理的に意志決定していく力を育てる授業の構築を目指す。そのために、従来の社会科教育の視点に加え、認知研究の成果に着目し、相互作用を核とした授業改善を行う。

4. 2. 社会科教育における見方・考え方

昭和22年に成立した社会科は、問題解決学習から系統学習への方針転換を経て、近年、再び課題学習が重視される傾向にある。平成10年の学習指導要領改訂においても「生きる力」を育む教育を推進する観点から、社会科各分野の特質に応じて、見方や考え方を身につけ、調べ方や学び方を学ぶ学習の充実が図られている。

社会科は、社会認識を深める学習を通して公民的資質を養うことを目指す教科である。このうち、社会認識とは社会に関する見方・考え方を指す。しかし、ひとくちに見方・考え方といっても、その捉え方は様々ある。それは、これまでの社会科教育が多様な授業論のもとに展開されてきたことにも由来する。それぞれの考え方を大別すると、次の3つの立場に分類することができる[原田智仁 2002]。

① 社会の事実や過程に関する個別的知識に対して、社会諸事象の関係を説明する一般知識を「見方考え方」と捉える方法。

② 「見方考え方」を「見方」と「考え方」に二分し、社会に関する事実判断を示す知識を「社会的見方」、価値判断を示す知識を「社会的考え方」と捉える方法。

③ 「見方考え方」を「内容的見方考え方」と「方法的見方考え方」に二分する方法。

岩田一彦（2001）は、「社会的見方・考え方」を「社会的見方」と「社会的考え方」に分けて授業論を展開している。これは原田（2002）による分類の②の立場にあたる。岩田は「社会的認識内容を豊かに育成し、それを判断材料として価値判断させれば市

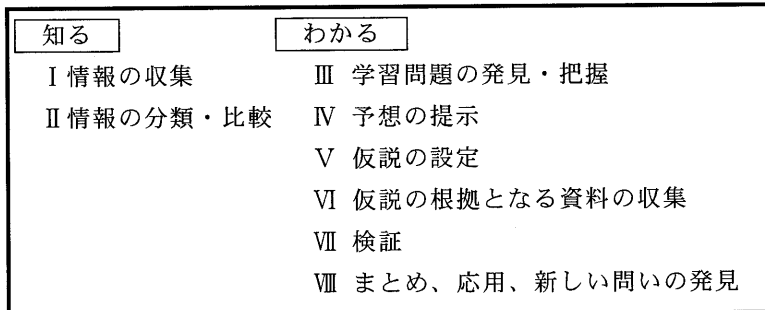
民的資質が育つ」という理論を示し、市民的資質を育成するためには、単元設計も概念探求過程（認識内容の習得）から価値判断過程という流れにすべきであるとしている。

概念追求過程は「知る」「わかる」の過程（社会的見方の学習過程）にあたる。「知る」は社会的事象の存在を認識することであり、「わかる」は社会的事象間の関係を認識することである。学習は「知る」から「わかる」へと進んでいくが、問題解決的な学習の中で、生徒が「なぜ」という「問い」を持ち、解決していく過程が学習の基本形であり、その過程を「知る」「わかる」の学習過程と表現している。

一方の価値分析過程は、価値の対立する状況の中で価値分析を行い、合理的意志決定を行う過程である。この過程が「考える」過程（社会的考え方の学習過程）である。岩田は合理的意志決定能力を「生きる力」の中核をなす力と位置づけ、「子どもが社会に出たときに本当に必要なことは、それまでに学んだことを活用して判断することである。その判断は思いつきのその場限りの判断に陥ってはならない。当然、その判断がどのような事態を将来に招くのか未来予測をしての、合理的判断であることが求められる。このような判断をする能力が、合理的意志決定能力である」としている。概念追求過程と価値分析過程の関係は図1のようになる。

●概念追求過程

（社会的見方の学習過程）



●価値分析過程

（社会的考え方の学習過程）

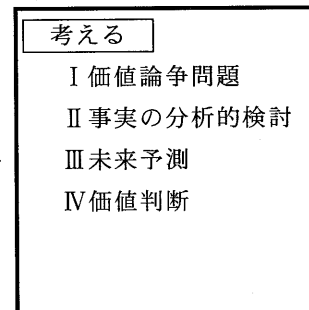


図1 社会科の授業過程

（岩田一彦,2001,社会科固有の授業理論,明治図書, pp.27-33 より作成）

本実践では、岩田(2001)の理論に基づいて中学校社会科地理的分野において授業改善を行う。ただ、地理的事象について価値判断するとき、その根拠となる事象は多岐にわたる。実際に生徒が価値判断を行うとき、他分野・他教科の既習の知識が活用されたり、総合的な学習の時間の学びがいかされることも多い。地理教育の枠組みだけで考えると、このような学習課題は地理的分野の課題としては内容を逸脱しているのではないかという疑問が生じる。その疑問に明快な答えを示しているのが、岩田一彦(1984)の捉え方である。岩田は「地理的分野において、地理的な見方考え方を育成していくことは重要な部分を占めている。しかし、それは社会諸科学の一分野としての位置と考えるべきである。そして、地理的分野で提示される世界の諸地域、日本の諸地域などの地理的事象は、社会的見方考え方を育成する素材を提供していると考えられるべきであろう」としている。つまり「社会理解のための地理教育」として広く社会的見方・考え方を身につけるためには、地理学はもちろん社会諸科学の視点を組み込んだカリキュラムが作成されるべきだという立場である。

本実践で取りあげる国内外の人口に関わる問題を例にあげると、地理的事象はもとより、政治や経済、社会や文化、その他人権に関わる問題をも視野に入れた思考が必要となる。入り口は人口地理という狭い枠組であるが、最終的に生徒に身につけさせたい力は社会的な見方・考え方であることを念頭において授業を構想する。

4. 3. 認知研究の視点からみた見方・考え方

社会科における見方は、説明力が大きい概念、法則性を子どもが探求していく過程である[岩田一彦 2001]。これらは人間の知的働きそのものに関わることであるため、本実践が目指す授業改善においても認知研究の成果を取り入れる必要があると考える。また、生徒の見方・考え方を育てる具体的な手立てを明らかにし、授業を構想する前提として、子どもの学習や発達そのものについて理解を深めておく必要がある。ヴィゴツキー（2003）は、子どものなかに次の2つの水準を見だし、教授・学習と発達の関係を明らかにしている。

- ①「現在の発達水準」・・・すでに「成熟した精神機能」をあらわす。自主的な課題解決の水準（自主的活動において可能な問題解決の水準）。
- ②「明日の発達水準」・・・現在生成しつつある過程、成熟したばかりの、発達しはじめたばかりの過程を意味し、大人の助けや友達の協力によって可能となる課題解決の水準。

ヴィゴツキー（2003）は、この2つの発達水準の間を「発達の最近接領域」と呼んでいる。佐藤公治（1999）は、最近接発達領域のゾーンの中には、親や教師の教育的働きかけばかりではなく、本人からの働きかけも含めた仲間との相互作用的な活動や、まわりの社会・文化的なシステムといったものを含めた外的諸変数が入ってくることで、さらに、この外的変数に支えられて展開する認知的実践の活動や知識・能力が内化され、発達となって出現していく過程を同時に扱ったものと捉えるべきであるとしている。また、佐藤公治（1996）は、ヴィゴツキーの発達理論では、相互作用は認識形成に直接的な影響を与えるものと位置づけ、相互作用という状況は単に認知的葛藤を個人の内部に発生させるだけでなく、新しい知識の形成の場そのものであるとしている。

正司和彦（2003）は、子どもの認知過程における相互作用の重要性に着目し、相互作用を活性化させるための学習環境の開発及び授業改善を行っている。具体的な学習過程として以下の5つの流れを示している。

- ① 学習の目的や動機を見だし共同体に参加する。
- ② 新しい体験をしたり新しい知識にふれたりする。
- ③ 言語や文化的道具を媒介としたコミュニケーションを行い、知の獲得と理解の深化を行う。
- ④ 学習共同体において知識や考えを創りだし、共有化を行う。
- ⑤ 自分自身の知識や考えを再吟味し、学習を振り返り自己を認識する。

本実践においても、個人での学習の場と相互作用の場を設定し、子どもが学習共同体の中でコミュニケーションを行うことで知識を獲得、構成していく授業改善を行う。

4. 4. 学習支援システムの導入

生徒一人ひとりが、自分が学習集団のなかでかけがえのない存在であり、今まさに

授業に参加しているという手応えを感じることができれば、生徒の主体的な学びの意欲は持続する。そのためには、生徒が社会的事象を身近なものとして感じること、それに対する自分なりの意見がもてること、その意見を表明したり、友だちと意見交換をすることが大切であるが、内容科目という側面が強い社会科授業では、これらの活動に十分な時間を割くことは難しい。例えば、授業時間内で意見発表の場を保障するといっても、50分間という短い時間でクラスの生徒全員が意見を表明し、個々の意見がクラス全員で共有できるような形で示され、クラス全員の考えを知ることができる、そして、授業の終末で振り返りやまとめを行うとき、生徒が活用しやすい形に意見交換の記録が整理されているといったことは、従来の授業形態では非常に困難であった。

そこで本実践では、ネットワークにつながったコンピュータ上で意見発表や討論ができる電子掲示板を中心とした学習支援システムを授業に導入する。電子掲示板は、限られた時間のなかで全員の生徒が授業に参加できる場を提供する。しかし、ただ掲示板を使うだけでは生徒の学習意欲は持続しない。なぜ、電子掲示板を使って学習するのか、そのよさを生徒が実感できるのは、活発な意見交換が行われたときである。そのためには、生徒に価値判断させる学習テーマが優れた事例であることが不可欠となるが、それだけでは不十分である。相互作用を活発にするためには、生徒の考えを引き出し、関連づける仕掛けが必要となる。そこで本実践では、まず生徒の視野を広げ、さまざまな事象を比較関連づけながら思考できるように支援する機能として、投稿画面上に相互作用をうながす「つなぎ言葉」を用意する。用意する「つなぎ言葉」は「それで」「でもね」「そして」「つけたして」「つまり」「たとえば」「ところで」の7つである。

また、社会的事象に関してどのようなカテゴリーがあるのか、あらかじめ生徒に示して社会的見方・考え方を育成するための支援機能を投稿画面上に用意する。社会的事象に関するカテゴリーには「政治」「経済」「社会」「文化」「自然」「産業」「生活」「環境」「交通」「国際」「地域」がある。さらに、肯定を意味する「○」と否定を意味する「×」に加え、本研究ではこれらを「タグ情報」とよぶ。

意見投稿の際、生徒が「つなぎ言葉」「タグ情報」を選択、活用することで、自分の立場を明確にしたり、考えを吟味しながら方向づけ、深めることができる。

4.4.1. つなぎ言葉の効果的活用

本実践では、社会認識内容を身に付ける過程、価値判断をする過程において、生徒は様々な情報に関連づけて思考する。関連づける情報には社会的事象そのものだけでなく、仲間が発表した社会的事象に対する意見をも含む。このように本研究では、学びの過程を重視するため、仲間との相互作用を活性化させる「つなぎ言葉」にもう1つの役割を持たせる必要がある。それが、話し合いを振り返り吟味するという視点でみた「つなぎ言葉」である。岡田雅樹(2003)は、「つなぎ言葉」の接続関係を分類、記号化し、コミュニケーション構造の可視化を実現している。本実践における7つの「つなぎ言葉」も岡田(2003)の「つなぎ言葉」を実際の授業実践にあてはめて活用したものである。

4.4.2. 「タグ情報」の効果的活用

本実践で活用する「タグ情報」の活用例を図2に示す。生徒は「政治」「経済」「社会」など、あらかじめ用意された「タグ情報」の中から自分の意見内容に合致したものを選択し、付記して電子掲示板に意見投稿する。「タグ情報」は社会的事象につい

て考えるための「切り口」となり、考えをまとめるためのきっかけとなる。また「○」「×」というタグを用意し、価値判断場面において生徒が自己の立場をはっきりさせて意見発表ができるよう支援する。

「タグ情報」の選定は次のような方法で行った。

- ① 単元を中心となる授業での生徒の発言内容を予想し、列挙した。
- ② 社会科教員5名が、①で挙げた1つひとつの発言に対して「タグ情報」をつけた（教員1人ひとりが自由にタグ名を設定し、互いに相談せずに個々の判断でタグをつけた）。
- ③ 5名の社会科教員のつけた「タグ情報」を集計し、使用頻度と内容のまとまりを考慮して分類した。

その結果、本実践では「政治」「経済」「産業」「社会」「生活」「文化」「環境」「自然」「地域」「交通」「国際」という11の「タグ情報」を採用することにした。「国際」については使用頻度が少なかったが、学習する単元が「世界からみた日本の特色」であり、生徒の視点の広がり期待して活用することを決めた。

しかし、あらかじめ「タグ情報」を示しておくだけでは、生徒の思考を限定した枠組の中に押し込んでしまうことになる。その結果、価値判断の根拠として必要となる社会認識内容について、生徒の理解が浅くなったり抜け落ちてしまったりする可能性がある。自分の考えが用意された「タグ情報」では言い表せない、広く、深い内容に迫っていると気づいた生徒に対しては、それを認めて活かす方法が必要となる。そこで本研究では、生徒が自分で考えた「タグ情報」を入力する欄を投稿画面上に設ける。

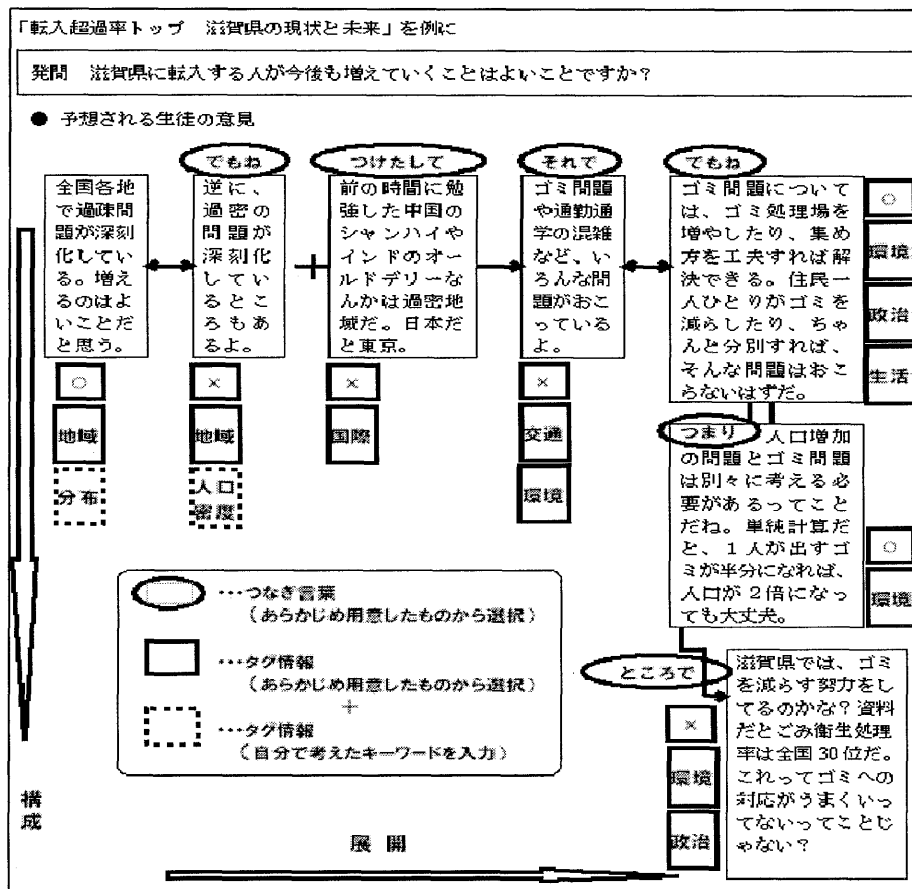


図2 本研究におけるコミュニケーション構造の可視化

本実践で活用する電子掲示板の画面例を図3・4に示す。

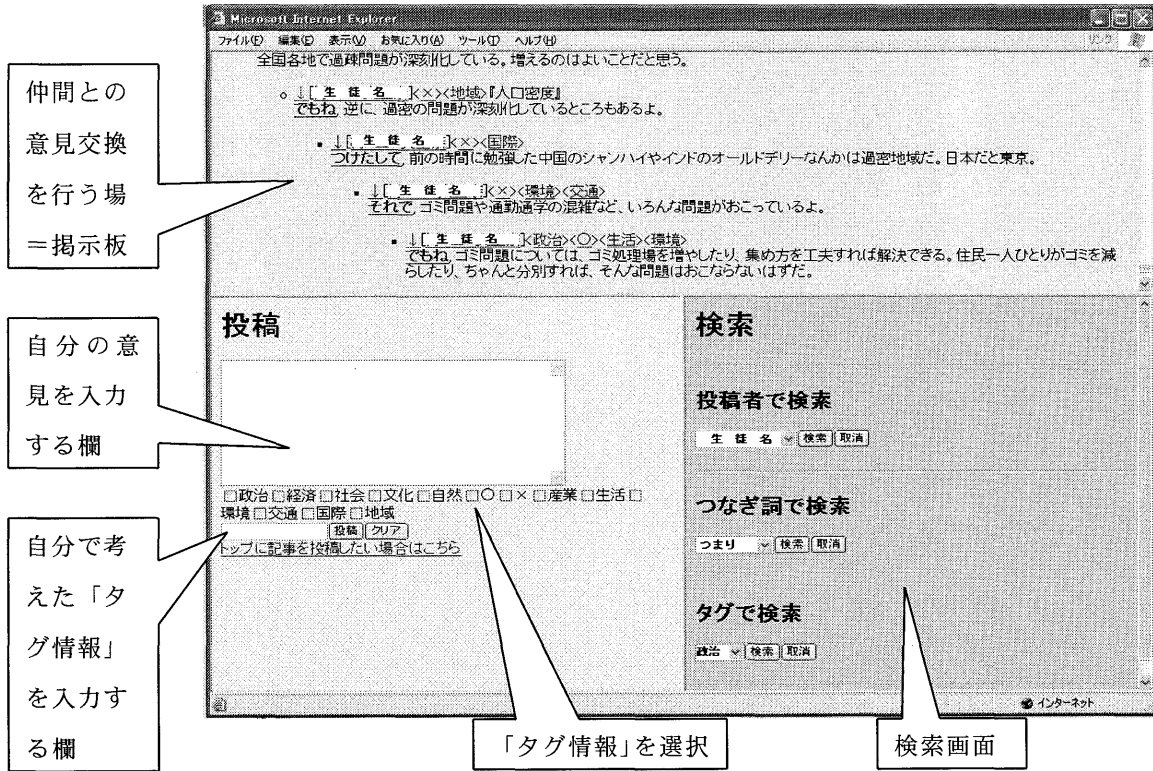


図3 本研究で活用する電子掲示板の投稿画面例 ①

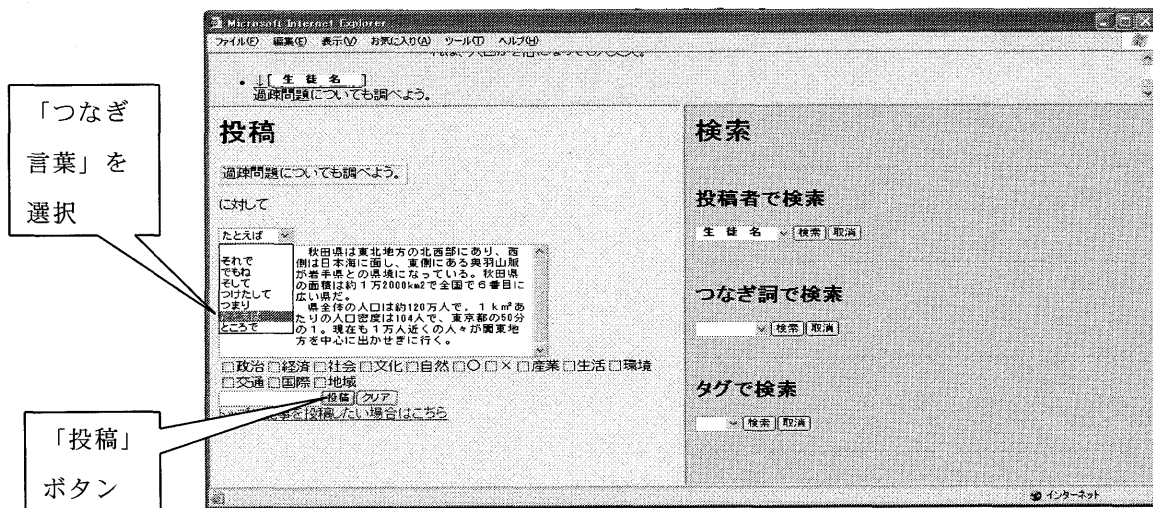


図4 本研究で活用する電子掲示板の投稿画面例 ②

5. 授業実践

5.1. 指導計画

社会科教育と認知研究の視点を組み合わせた実践計画を以下に示す。

- ・ 期間 2005年6月20日～7月20日
- ・ 指導にあたって

世界的視野から見て、日本は人口が多く、また、人口密度が高く平均寿命が長い

国である。国内では、高齢化、少子化の進展が著しく、過密、過疎の問題への対策も急務となっている。本授業では転入超過率が全国1位の滋賀県の現状を知り、その未来について考える過程において、人口に関するさまざまな課題を関連づけて考えさせ日本の地域的特色を明らかにする視点や方法を身につけさせる。

事前アンケートの結果を分析すると、地理的分野の授業を楽しんでいる生徒はクラスの半数あまりである。地理の学習の仕方がわかっている生徒は半数に満たない。地理の学習は、受験以外の場面でも役立つと感じながらも、大人になっても地理を学び続けたいと思う生徒は少数である。多くの生徒は、友だちとの意見交換や討論、話し合いで進める授業を「よい授業」と評価しながらも、積極的に挙手発言することが苦手だと感じている生徒も多い。コンピュータを活用した授業については、クラスの4分の3の生徒が「よい授業」だと考えており、ほとんどの生徒がコンピュータの基礎的な操作方法を身につけている。電子掲示板を利用したことのある生徒、日頃から電子メールを利用している生徒はそれぞれクラスの3分の1程度で、約半数の生徒がチャットの利用経験がある。普段から携帯電話のメール機能を利用している生徒も数名いる。

本単元では、電子掲示板を活用した授業改善を行う。生徒が社会的事象を的確に捉えるための視点を持ち、社会の問題に対して習得した社会認識内容を関連づけて考え、合理的に意志決定していく力を育てる授業を目指す。

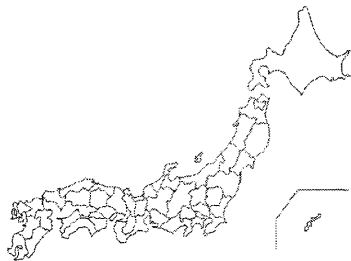
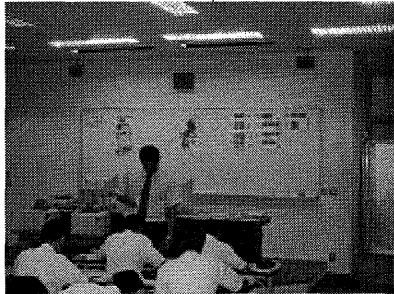
・指導計画

社会科教育の視点で構成した学習過程		認知研究の視点で構成した学習過程
第1・2時 人口ピラミッド からみえるもの	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">知る</div> I 情報の収集 II 情報の分類・比較	①学習の目的や動機を見だし、共同体に参加する。 ②新しい体験をしたり、新しい知識にふれたりする。
第3・4時 授業A 世界の人口問題	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">知る</div> I 情報の収集 II 情報の分類・比較 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">わかる</div> III 学習問題の発見把握 IV 予想の提示 V 仮説の設定 VI 仮説の根拠となる資料の収集 VII 検証 VIII まとめ・応用・新しい問いの発見 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">考える</div> I 価値論争問題 II 事実の分析的検討	②新しい体験をしたり、新しい知識にふれたりする。 ③言語や文化的道具を媒介としたコミュニケーションを行い、知の獲得と理解の深化を行う。新しい体験をしたり、新しい知識にふれたりする。 ④学習共同体において、知識や考えを創りだし、共有化を行う。 ⑤自分自身の知識や考えを再吟味し学習を振り返り自己を認識する。
第5時 授業Aのまとめ		

<p>第6・7時 授業B かたよる人口</p> <p>第8時 授業Bのまとめ</p>	<p>知る</p> <p>I 情報の収集 II 情報の分類・比較</p> <p>わかる</p> <p>III 学習問題の発見把握 IV 予想の提示 V 仮説の設定 VI 仮説の根拠となる資料の収集 VII 検証 VIII まとめ・応用・新しい問いの発見</p> <p>考える</p> <p>I 価値論争問題 II 事実の分析的検討</p>	<p>②新しい体験をしたり、新しい知識にふれたりする。</p> <p>③言語や文化的道具を媒介としたコミュニケーションを行い、知の獲得と理解の深化を行う。新しい体験をしたり、新しい知識にふれたりする。</p> <p>④学習共同体において、知識や考えを創りだし、共有化を行う。</p> <p>⑤自分自身の知識や考えを再吟味し学習を振り返り自己を認識する。</p>
<p>第9時</p>	<p>学習のまとめ</p>	<p>⑤自分自身の知識や考えを再吟味し学習を振り返り自己を認識する。</p>

・学習指導案（第6時・第7時）授業B 転入超過率トップ滋賀県の現状と未来

第6時 転入超過率トップ滋賀県の現状

学 習 活 動	評 価 規 準
<p>授業が始まると、日本地図（白地図）を配付する。</p>  <p>ペンを2色用意し、まず、そのうちの1色を持つよう指示する。</p> <p>指示1 これから県名を5コ言います。 白地図の中に県名を書き入れなさい。</p> <p>「何も見ないで、いくつ書けるか挑戦だ！」と付け加え、テンポよく県名を言っていく。</p> <p>県名 滋賀・神奈川県・埼玉・千葉・福岡</p> <p>続けて、もう1色のペンに持ちかえるように指示する。</p> <p>指示2 続けて府県名を5コ言います。同じように白地図の中に府県名を書き入れなさい。</p>	<p>②新しい体験をしたり、新しい知識にふれたりする</p> <p>知る I 情報の収集</p> <p>ウー③ 地図や統計資料、グラフなど学習に役立つ情報を適切に選択して活用している</p> 

府県名 長崎・大阪・秋田・和歌山・愛媛

書けていない府県名があれば、地図帳で位置を確認して書き入れ、前後の席の友だちと確認し合うよう指示する。

全員が作業を終えたことを確認し、「最初の5つの県と、あとで言った5つの府県にはどんな違いがあるのだろうか？」と問いかける。

少し間をおいて「転入超過率」と板書し、転入者と転出者の差（転入超過数）の各都道府県の5歳以上人口に対する比率が高い5県と低い5府県であることを教える。

授業ノートを配付、資料1「都道府県間の転入率」を見るよう指示し、次の3点を確認する。

- ・東京に隣接する関東3県が上位にあること
- ・下位5県に「大阪」「和歌山」があること
- ・他府県と比較して、滋賀県の転入超過率が高いこと

資料1「都道府県間の転入率」

ベスト5

順位	都道府県	転入超過率
1	滋賀	2.3%
2	神奈川	0.9%
3	埼玉	0.8%
4	千葉	0.7%
4	福岡	0.7%

ワースト5

順位	都道府県	転入超過率
47	長崎	-1.8%
46	大阪	-1.6%
45	秋田	-1.2%
43	和歌山	-1.0%
43	愛媛	-1.0%

※資料1は平成12年国勢調査に基づく人口移動集計をもとに作成
「マザーレーク（琵琶湖）は住みやすい!？」と板書する。
続けて、資料2「滋賀県 人口増加数・増加率」を見るよう指示する。

資料2「滋賀県 人口増加数・増加率」

人口増加数ベスト5

順位	市町村名	人口増加
1	草津市	13622人
2	大津市	11900人
3	栗東町	6097人
4	彦根市	4356人
5	守山市	3697人

人口増加率ベスト5

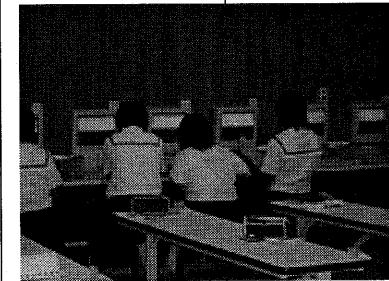
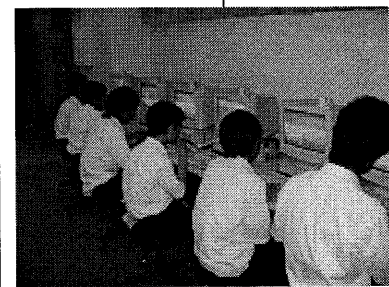
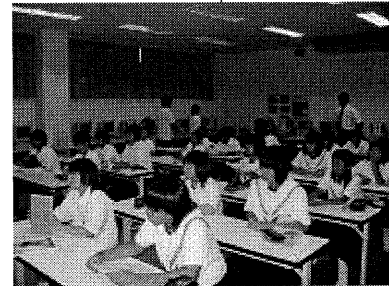
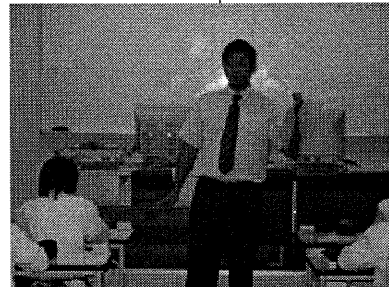
順位	市町村名	人口増加
1	草津市	13.4%
2	栗東町	12.5%
3	愛知川町	12.1%
4	志賀町	12.0%
5	蒲生町	10.0%

※資料2は平成12年国勢調査、前回との比較による数字。

地図帳（帝国書院p73）で資料の市町の位置を確認させる。
特に南部の平野で転入率が高いこと、これらの市町は阪神工業地帯が内陸に伸びてきた地域であり、高速道路や鉄道の沿線で、京都や大阪の通勤圏であることに気づかせる。

知る

Ⅱ 情報の分類
・比較



<p>説明1 滋賀県では、5年前と住所の異なる人の割合は20～30歳代で50%前後と高率です。マザーレーク琵琶湖を抱える滋賀県に移り住む若者が増えているのです。</p>	<p>III わかる 学習問題の発見 IV 予想の提示 V 仮説の設定</p>	<p>ウー③ 地図や統計資料、グラフなど学習に役立つ情報を適切に選択して活用している</p> <p>アー③ 日本全体の視野から見た国内の地域的特色を、人口の観点から意欲的に追究している</p>
<p>続けて資料「統計で見る滋賀」を配付する。</p>	<p>③言語や文化的道具を媒介としたコミュニケーションを行い、知の獲得と理解の深化を行う</p>	
<p>発問4 滋賀県に住むとどんなよいことがあるのですか。 指示6 自分の考えを授業ノートに書きなさい。</p>		
<p>5分後、電子掲示板に自分の意見を書き込ませる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出生率が高いので、子どもが多い。 ・婚姻率が高く、離婚率が低い。 ・大学や短大への進学率が高い。 ・図書館や博物館の数が多いのでよい。 ・持ち家比率が高く、延べ床面積が広いのは、土地が安いからだと思う。 ・自分の家を持てるのはいい。 ・完全失業率が低い。 ・身体障害者の施設が多い。 ・気候も平均気温が15度だと過ごしやすいほうだと思う。 ・県民所得が4位だから、豊かな県だと思う <p>自分の意見が書き込めたら、友だちの意見を閲覧し、つけ足しの意見を打ち込ませる。</p> <p>チャイムがなったら、授業ノートを提出するよう指示して授業を終える。</p>		

第7時 転入超過率トップ滋賀県の未来

学 習 活 動		評価規準
<p>第5時のあと家庭学習にしていた調べ学習ワークシートを返却し、過疎・過密について調べたことを思い出させる。</p> <p>授業ノートを配付し、滋賀県の位置を確認する。</p> <p>続けて前時の学習を振り返る。滋賀県が転入超過率全国トップであること、人口が増えている市町が滋賀南部に集中していることを確認する。さらに、この地域が京阪神地域のベッドタウンであることに気づかせる。</p>	<p>学習問題の把握 VI 仮説の根拠となる資料収集 VII 検証 VIII まとめ、応用 新しい問いの発見（この授業では教師主導で行う）</p>	
<p>発問5 滋賀県に転入する人が、今後も増えていくことはよいことですか。 指示7 授業ノートに自分の考えを書きなさい。</p>		

5分後に電子掲示板に自分の意見を書き込ませる。

「よい」側の意見

- ・他の地域では過疎の問題が深刻化しているので、よいことだと思う。
- ・特に若者が移り住んでいるので、町に活気がでると思う。
- ・今でも、全国からみて図書館や博物館が多いので、もう少し人口が増えてもいいと思う。
- ・たくさんの人が移り住んできてくれる町はいい町だと思う。
- ・南部だけでなく北部にも人が住んだらいいと思う。
- ・人口が減ってしまうなら、増えるほうがいいと思う。

「よくない」側の意見

- ・今でもごみ衛生処理率が低い。これ以上人が増えると、ゴミがあふれると思う。
- ・今は住みやすいけれど、人口が増えすぎると過密の問題も起こってくると思う。
- ・土地の値段も上がって、持ち家率が下がると思う。
- ・施設や学校が足りなくなると困る。
- ・大型小売店の割合が全国に比べて低いので買い物でレジに並ぶ時間が増えそう。
- ・ホームヘルパーの数が足りない。
- ・公害苦情件数が増えると思う。

自分の意見を書き込んだら、友達の意見も閲覧するように促す。発言が途切れると、つけ足しの意見や反対意見を考え、電子掲示板に書き込むよう指示する。

まとめ 滋賀は、2030年まで人口増加が続く唯一の県であると予測されています。現在、「自然と人間がともに輝くモデル創造立県・滋賀」という基本目標を掲げ、様々な施策が行われています。

- ① 授業を振り返ってわかったこと、思ったことを書く。
- ② 友達の考えと比較してもう一度自分の考えをまとめる。

④学習共同体
において、
知識や考え
を創りだし
共有化を行
う

考える

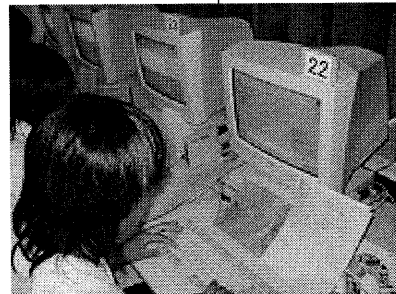
- I 価値論争問題
- II 事実の分析的
検討
- III 未来予測
- IV 価値判断

イー③

日本全体の視野から見た国内諸地域の特色を、様々な事象と関連づけて考察している

アー③

日本全体の視野から見た国内の地域的特色を、人口の観点から意欲的に追究している



⑤自分自身の
知識や考え
を再吟味し
学習を振り
返り、自己
を認識する

5.2. 評価

	ア 社会的事象への 関心・意欲・態度	イ 社会的な 思考・判断	ウ 資料活用の 技能・表現	エ 社会的事象につ いての知識・理解
第1時	①世界と比べて見た日本の地域的特色と日本国内諸地域の特色に関する関心が高まっている		①世界的視野から見た日本の地域的特色をとらえるために、グラフや地図など、学習に必要な情報を適切に活用している	
第2時		①世界的視野から見た日本の地域的特色を人口の観点から考察している		①人口の観点から比較し関連づけてとらえた日本の地域的特色を理解し、知識を身につけている
第3時			②地図や統計資料、グラフなど、学習に役立つ情報を適切に選択して活用している	
第4時	②学習課題に対して意欲的に追究し、人口問題について世界的視野で考える態度が身に付いている	②社会的事象を関連づけながら、人口問題について世界的視野で考察することができる		
第5時				②人口問題について世界的視野で考え日本の地域的特色を理解するために必要な知識として身につけている

第6時			③地図や統計資料、 グラフなど、学習 に役立つ情報を適 切に選択して活用 している	
第7時	③日本全体の視野か ら見た国内の地域 的特色を、人口の 観点から意欲的に 追究している	③日本全体の視野か ら見た国内諸地域 的特色を、さまざ まな事象と関連づ けて考察している		
第8時				③人口の観点から、 傾向性や類似性に 着目してとらえた 国内諸地域の特色 を理解し、その知 識を身につけてい る
第9時	④我が国の国土の特 色を、世界的視野 及び日本全体の視 野に立って人口の 観点から捉えよう としている			④世界と日本、国内 諸地域を比較関連 づけて地域的特色 を明らかにする視 点や方法を理解 し、それらの知識 を身につけている

提出物（レポート）

第5時			④人口に関する資料 を収集し、効果的 に活用してレポー トにまとめている	
第8時		④テーマを決めて追 究し、考察した過 程や結果をレポー トにまとめている		

授業ノートと電子掲示板に投稿された意見内容が評価のための資料となる。また、授業の感想やレポートを点検し、次の基準にもとづいて生徒への評価を行う。

おおむね満足できると判断できる状況（評価規準） B	十分満足できると判断する視点（できる状況） A	努力を要すると判断された生徒への対応・手だて
ア 社会的事象に対する関心が高まっている。学習課題に対して意欲的に追究しようとしている。	さまざまな社会的事象に関心をもち、それらを比較関連づけながら意欲的に学習課題を追究している。	学習過程でつまずきのある生徒に対しては、個別に学習の方法を確認したり、自ら学習を方向づけることができるよう支援する。
イ 社会的事象について考察し、価値判断している。	さまざまな社会的事象に着目し、それらを比較し、関連づけながら考察し、価値判断している。	机間指導による言葉がけ以外に、必要であれば電子掲示板を活用して適切なアドバイスをを行う。また、授業後に提出された授業ノートやレポートの点検を行い、コメントをつけて返却するなど、学習の励ましや援助を行う。
ウ 地図や統計資料、グラフ等、課題追究に役立つ情報を適切に選択し、活用している。	課題追究に役立つ情報を見だし、複数の情報を関連づけて活用している。	
エ 社会的事象について理解し、地域的特色を説明している。	さまざまな社会的事象を比較関連づけ、類似性や傾向性を踏まえて、地域的特色を説明している。	

6. 成果と課題

本実践では、社会科において生徒の社会的見方・考え方を育成することを目的として授業改善を行った。そのための方略として、生徒が学習問題を把握し、新しい問いを発見していく過程、それまで学んだことを比較関連づけながら思考判断する過程において、相互作用を核とした授業を構想した。

授業改善をする上で不可欠となる学習支援システムの構築にあたって、まず着目したのが相互作用を促す媒介となる「つなぎ言葉」「タグ情報」である。その意義を教育的に捉え、学習環境からの支援として活用した。本研究では、さらに、その学習支援システムを社会科教育の研究成果と認知研究の知見をいかした学習過程に組み込んで授業を構成することによって、学びの過程を重視した授業改善が可能となることを明らかにした。

学習支援システムは、育成すべき生徒像を常に念頭に置き、また、教科のねらいと学習活動全体の流れの中での位置づけを明確にして導入されるべきであり、そうすることで、学習支援システムは、より効果的に機能する。

このような考えから、本研究では、まず、生徒が社会的事象を的確に捉えるための視点をもち、さらに、社会の問題に対して習得した社会認識内容を関連づけて考え、合理的に意志決定していく力を育成するというねらいを設定した。そのねらいに迫るために、学習支援システムを活用した意見交換と個人によるまとめを

中心に授業を展開した。その結果、生徒は習得した社会的見方を駆使して思考し、価値判断を行うことで社会的考え方の基礎を身につけていった。

本研究では、自己の考えを吟味して意味づけをし、その考えを示しながら他者と交流することで思考を深めるという「生きる力」の育成にも通じる活動を通して、対象とする生徒全員が社会的見方・考え方の基礎を習得するに至ったのである。

さらに今後、生徒の「つなぎ言葉」の活用技能を高めることによって、より高い学習効果を得ることできると考える。相互作用の場において「つなぎ言葉」が有効に活用されれば、仲間との知的な交流の輪が広がり、思考が深められる。

そのためには、支援方法を見直していくことが必要となる。その手立てとして、「つなぎ言葉」の活用法について、生徒同士が相互に意見交換をする機会を設定することが考えられる。また、メタ情報としての「つなぎ言葉」の効果に着目させ、接続関係から捉え直して「つなぎ言葉」を活用させることも必要である。さらに、生徒の要望も取り入れながら「つなぎ言葉」を選定していくことも重要であることが明らかになった。

これらの成果をふまえ、課題を克服しながら、さらに授業改善を継続していくことが、仲間と考えを交流し、仲間の良さを発見しながら知を共有し高めていく授業の創造へと結びつく。それが、生徒の社会的な見方・考え方を育成し、「生きる力」を育むことにつながると考える。

【参考文献】

- ・正司和彦，2003，探求と知の共有化のための授業実践とこれを支援する分散協調学習環境の開発，平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基礎研究(C)(2)）研究成果報告書
- ・佐藤公治，1999，対話の中の学びと成長，金子書房
- ・佐藤公治，1996，認知心理学5 学習と発達（波多野誼余夫編），東京大学出版会
- ・原田智仁，2002，社会科教育へのアプローチ，現代教育社
- ・教育課程研究センター，2001，評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）評価規準、評価方法の研究開発（報告），教育課程研究センター
- ・岩田一彦，2001，社会科固有の授業理論30の提言，明治図書
- ・岩田一彦，1984，地理教科書を活用したわかる授業の創造，明治図書
- ・岡田雅樹，2003，探求と知の共有化のための授業実践とこれを支援する分散協調学習環境の開発，平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基礎研究(C)(2)）研究成果報告集・研究代表者正司和彦）
- ・ヴィゴツキー，2003，土井捷三ほか訳，発達の最近接領域の理論，三学出版